Osaka University Knowledge Archive

Title	音訳語「珈琲」の歴史
Author(s)	田野村, 忠温
Citation	阪大日本語研究. 2021, 33, p. 33-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81237
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『阪大日本語研究』33（2021）

音訳語「珈琲」の歴史

The history of ‘珈琲’, a *Hanzi/Kanji* transliterated name for coffee

田野村 忠温
TANOMURA Tadaharu

キーワード：「珈琲」、「咖啡」、コーヒー、音訳語、漢字表記

要旨

コーヒーの名称の漢字表記「珈琲」は日本で作られたと多くの言語研究者が言う。そして、その考案者を蘭学者の宇田川榕庵として特定する説まであり、通俗書やインターネットを通じて広く流布している。しかし、そうした通説、俗説はすべて正当な根拠を欠く想像に過ぎない。

言語の歴史を想像に頼って論じることはできない。ここでは、資料の調査と分析に基づいて、「珈琲」という表記の現在確かめ得る最初期相を明らかにするとともに、それがその後日中両国でたどった歴史を跡付ける。

1. はじめに

現在、コーヒーの名称の漢字表記は中国語では「咖啡」であり、日本語では「珈琲」である。過去には両言語において多様な漢字表記が使われたが――中国語では「咖啡」のほかに「加非」「架非」「哈非」「喀啡」など、日本語では「骨喜」「骨非」「哥兮」「哥非乙」などがあった――、その後淘汰によってそれぞれ「咖啡」と「珈琲」に収束した。日本ではコーヒーは当初多く「コッヒー」「コッヘイ」「カッヘイ」などと呼ばれていた。

「咖啡」という音訳語――漢字の読みを使って漢字表記された外来語[1)]――は中国で早くから使われていた。現在知られているその最も古い記録は、入華英国人宣教師ロバート・モリソン（Robert Morrison、中国名馬礼遜）が1819（嘉慶24）年に刊行した華英辞典*A Dictionary of the Chinese Language, Part II*『五車韻府』, Vol. Ⅰに見出される。

しかし、「咖啡」の変種と見られる「珈琲」は中国の文献にはあまり現れない。そのこともあって、「珈琲」は日本で作られたとする見方が従来多くの言語研究者によって述べられてきた。しかも、その考案者は津山藩医、蘭学者の宇田川榕庵（ようあん）（1798～1846年）であったとする、今から80年も前に述べられた想像が今では通俗書やインターネットで疑われることなく流布している。しかし、そうした通説、俗説はすべてしかるべき根拠を欠いている。

以後、一部の引用の文脈を除き、漢字は原則として現代日本の字体による。

2.「珈琲」宇田川榕庵考案説

近年の「珈琲」和製説はいずれもただ思い込みや想像を述べるだけであるが、和製説の嚆矢でもある宇田川榕庵考案説は一応の証拠を示して述べられた。

宇田川考案説は奥山編（1940）に由来する。同論文の編者である木版画家奥山儀八郎は、古賀十二郎、石井研堂、勝俣銓吉郎らの支援を受け（奥山（1957））、過去の文献に現れるコーヒーの名称の多様な表記を徹底的に調査した。「珈琲」の起源に関する奥山の結論は次の通りである。ここでの「珈琲」への加点は原文におけるそれの再現である。

> これは年代不詳のものであるが、勝俣銓吉郎先生の珍蔵される、宇田川榕庵手控の蘭和字典と云ふものがある。それは、西洋ケイ紙に鵞ペン茶色インキで蘭語が書かれてあり、それに日本訳の書きこみがあつた。そのKoffij、Koffij boom（ママ）[2] の項に、同インキにて骨喜、哥兮とあり、同じ手蹟にて、墨で珈琲、架非と出してあつた。現在編者が調査した内で、珈琲の熟字は約三十二種類（中略）であるが、今日一般に使用されるのは、右榕庵の作字珈琲である。当然この栄誉は榕庵に帰すべきであらう。

文中に言う「宇田川榕庵手控の蘭和字典」は、現在早稲田大学図書館に『博物語彙』の書名を付して収蔵されている蘭和語彙集のことである。そのkoffijの項目を図1に示す。この写真は笹原（2006）にも掲げられている。

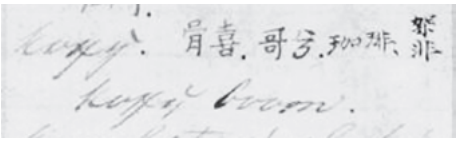

図1　宇田川榕庵の蘭和語彙集（早稲田大学図書館蔵）[3]

語彙集が宇田川榕庵の自筆によるものであるという勝俣の判断を信頼して言えば、それは19世紀の前半に作られたものであることになる――宇田川榕庵は1846年に没している――。この語彙集が、現在知られている限りにおいて、「珈琲」の現れる最も早い日本の文献である。

奥山は後に考察を著書の形にまとめた際（奥山（1957, 1965, 1973））には主張を弱め、「今までの調査では、宇田川榕庵の作字らしく思われる」と限定条件付きの推定に変えている。ま

た、奥山は著書では推定の背後にある思考を述べている。しかし、今では「珈琲」の考案者に関する結論の部分だけが人々の注目を集めて確定した事実であるかのように受け止められ、雑学愛好者の語り継ぐ定説と化している。多くの人に引用されることによって話が信憑性を増し、それがまたさらなる引用を誘発するという増幅の循環が形成されているものと言える。単純で万人が容易に理解でき、もっともらしい要素を含む話が好んで受け入れられるのは世の常である。

奥山は先の一節に続けて、「珈は即ち婦人の髪飾りの珠玉であつて、琲はその玉をつなぐ緒である」と述べ、「珈琲」の表記は実の成ったコーヒーの木の枝の様子を「見事な婦人の髪飾り」にたとえた名訳であると賞賛している。「琲」が「玉をつなぐ緒」だというのも、「珈琲」がコーヒーの木の枝の描写だというのも想像の断定に過ぎないが、聞く者の心を捉えるこの解釈が流布する俗説に彩りを添えている。髪飾り説に自己満悦した観のある奥山は奥山（1965, 1973）では実の成ったコーヒーの木の枝を描いて見せている[4)]。

言語研究の専門家でもない奥山が「珈琲」の起源を追求し、未刊行の蘭学資料中にその古い記録があることを突き止めたのは驚くべき快挙である。実際の発見者は勝俣だったのであろうが、それにしても奥山の探求の熱意がもたらした発見であることには変わりがない。しかし、勝俣と奥山がその発見に基づいて「珈琲」という表記を宇田川が考案したと考えたのは明白な論理の飛躍であった。宇田川の語彙集における「珈琲」の出現が意味するのは、言うまでもなく、その記入の時点において宇田川が「珈琲」という表記を知っていたということだけである。宇田川がそれを考案したかどうかはまったく別の問題である。

陳（2011）が、「名人造語説の流布」という現象を論じている。近代新語の早い用例が福沢諭吉や西周といった著名人の著作中に見出されれば当人が造語者であると即断し、また、他者のそうした見解を軽信することによって誤った説が定着していく現象である。「珈琲」の宇田川榕庵考案説の発生と普及もそれと同じことである。

問題は、単に判断が短絡的で証拠が足りないということではない。示された証拠自体がむしろ宇田川考案説の誤りを強く示唆している。そのことを理解するためにまず注意すべきは、上に引用した奥山編（1940）の一節にもある通り、宇田川の語彙集に書かれた「骨喜」「哥兮」「珈琲」「架非」のうち前２者と後２者とでは文字の色も筆画の様子も異なる――語彙集の本体はペン書き、加筆はおそらく毛筆によっている――、すなわち、「珈琲」と「架非」は後に書き加えられたものだということである。そのことはモノクロの図１ではやや分かりにくいが、早稲田大学古典籍総合データベースで公開されているカラーの画像を見れば一目瞭然である[5)]。

とすれば、ここには非常に不自然な要素があることになる。まず話の前提として、「珈琲」が中国で早くから普及した「咖啡」、ないし、その表記のもとになっている「加非」に基づいて作

られたものであることは確実である。「咖啡」は、「加」「非」の各字に、それが音訳であることを示す口偏を加えたものである。もし宇田川が、それまで自身やほかの日本人の使っていた「骨喜」「哥兮」などとは異なる「咖啡」や「加非」の表記が中国語にあることを新たに知ったのであれば、その正統な表記に触れることもなく、「珈琲」という改変後の表記、すなわち、亜流の趣味的な表記だけを語彙集に書き加えるとは考えがたい。しかも、「珈琲」に続けて書かれた「架非」は、何の変哲もない中国での音訳の1つである。宇田川が“髪飾りと玉の緒を表す漢字”を使って気の利いた表記を考案したのであれば、このような形での加筆にはならなかったであろう。「珈琲」と「架非」はともに宇田川が新しく見知った中国の表記を書き足したものだと考えるのが自然である。

さらに言えば、そもそも宇田川が語彙集に自作の音訳を書き込むということ自体が考えにくい。語彙集全体に目を通せば分かる通り、これは宇田川が各種の学習の過程で接した語彙や知識の記録である――その情報源の1つは、モリソンの英華辞典Robert Morrison *A Dictionary of the Chinese Language in Three Parts, Part III, English and Chinese*（1822（道光2）年）である[6]――。語彙集に記された語句は様々な学問分野にわたり、世界地理と動植物に関わるものが特に多い。そして、すべての項目が見出し語のアルファベット順に並べられており、折々に書き留めた記録を整理して通常の辞書の形に仕立てたものであることが分かる。もしそのようなところに我流の音訳を混入させれば、語彙集はもはや事実的な情報の集積でなくなってしまう。また、他人が見るわけでもない私的な語彙集に目立ちもしない形で音訳の創作を書いたところで何の意味もない[7]。

宇田川の語彙集に「珈琲」の2字が書かれているのを見てあとは考えたいように考えるという方法では――そしてまた、根拠もなく最初から和製であることを前提として語るという方法でももちろん――、真実を明らかにすることはできない。奥山の論述にはほかにも誤解の要素があるが、言語研究者による発言でもないので論評は省く。

3.「珈琲」の初期相

さて、「珈琲」という音訳語の歴史を論じるには、当然中国におけるその使用状況も確かめる必要がある。

3.1. 初出例

中国における「珈琲」の最も早い使用は、筆者の限られた範囲の調査の限りでは、1844（道光24）年刊の魏源撰『海国図志』50巻本の「巻八 東南洋」におけるルソン島の記述中に見出さ

れる。同書はアヘン戦争直後の中国で国防意識に基づいて編まれた世界地理書であり、その後増補されて1847（道光27）年には60巻本、1852（咸豊2）年には100巻本が出版された。『海国図志』における世界各地の地誌は各種の地理文献からの引用によって構成されている。

貿易通志曰：西班牙（スペイン）所拠之新地為呂宋（ルソン）島。近閩粤，産米及白糖、椰油、珈琲、麻、煙等。

（『貿易通志』によれば、スペインの占拠する新地であるルソン島は福建、広東に近く、米、白糖、椰子油、コーヒー、麻、タバコなどを産する。）

（魏源撰『海国図志』巻八 東南洋 呂宋夷所属島一、1844（道光24）年）

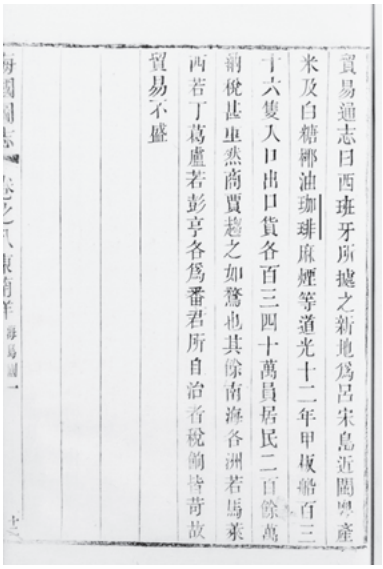
貿易通志曰西班牙所拠之新地為呂宋島近閩粤産
米及白糖椰油珈琲麻煙等道光十二年甲板船百三
十六隻入口出口貨各百三四十萬員居民二百餘萬
納稅甚重然商賈趨之如鶩也其餘南海各洲若馬来
西若丁葛盧若彭亨各為番君所自治者稅餉皆苛故
貿易不盛

図2　魏源撰『海国図志』50巻本（関西大学図書館蔵）[8)]

ここでは、『貿易通志』――ドイツ人宣教師カール・ギュツラフ（Karl Friedrich August Gützlaff、郭実臘、郭士立）の著作で、1840（道光20）年にシンガポールで出版された（熊（2009））――からの引用中に、ルソン島の産物の1つとしてコーヒーが挙げられている。沈国威氏に見せていただいた中国国家図書館蔵の『貿易通志』の画像で確かめたところそこではコーヒーは「咖啡」と書かれているので、『海国図志』への引用に際してそれが「珈琲」に書き換えられたことになる。『海国図志』は各種の文献からの引用時に原文の字句を変更していることがある（拙論（2019））[9)]。

ちなみに、『海国図志』50巻本における「珈琲」の出現は筆者の確認の限りにおいて上記の1例だけであるが、同60巻本では『万国地理全図集』からの引用における11例、100巻本ではさ

らに『外国史略』からの引用における6例が加わり、最終的に計18例になった。『万国地理全図集』は『貿易通志』と同じくギュツラフの著作で、1844（道光24）年に香港で刊行された（荘（2007）、荘校注（2019））[10]。そこでのコーヒーの名称の表記は、荘校注（2019）における翻字によれば、「加非」である。「馬礼遜（モリソン）」の著作と説明されている『外国史略』[11]はロバート・モリソンとその2人の息子によって著され、1847（道光27）年以後に完成した（鄒（2007, 2008））。同書はもはや原本が残っておらず、そこでコーヒーの名称がどのように表記されていたかは確かめることができない。

したがって、中国では遅くとも1844年までには「珈琲」の表記が作られていたことになる。その時期に日本製の音訳語が中国に流入して使われたということは考えられない。また、理屈のうえでは「珈琲」が中国と日本で独立して考案されたということもあり得るが、宇田川榕庵の語彙集の性質と、そこに「珈琲」が確実に中国製である「架非」とともに書き加えられているという事実（2節）を考えれば、その可能性は無限に小さい。

奥山儀八郎の説はおそらく言語の研究者にも陰に陽に影響を与えた。杉本（1963）は、コーヒーは「蘭学者・宇田川榕庵によって〈珈琲（コーヒ）〉の字があてられ」たと述べている[12]。林（1955）は、明治以来外来語に「漢字の表記が与えられ」た例として、「護謨（ゴム）」「瓦斯（ガス）」「馬穴（バケツ）」「倶楽部（クラブ）」「浪漫的（ロマンチック）」とともに「珈琲」を挙げている。国語学の概説書として学界にも大きな影響を与えたであろう築島（1964）――確認は1964年の第1刷および2002年の第42刷による――も、漢字の用法の解説において、「外国語を音訳した類」の例として「金平糖（コンペイトー）」「合羽（カッパ）」「倶楽部」などとともに「珈琲」を挙げており、すべてを日本製の音訳と考えているものと見られる[13]。同様の記述は、築島（1960）、岩淵（1970）、遠藤（1977）、田中（1978）、加藤（1979）、松岡（1982）、坂詰（1984）、月本（1984）、森下（1985）、柳田（1987）、石綿（1988）、田中他編（1988）、野村（1988）、峰岸（1994）、佐藤（1996）、島田（2003）、白川（2003）などでも繰り返されている。鈴木（1978）も「珈琲」を日本人による考案と考え、「口偏の方が合理的であるように思うが、日本人は豆粒を形体的に意識したためか、口偏を玉偏にかえてしまった」と述べている。漢和辞典である鎌田・米山（1987）は「珈琲は、コーヒーの日本における漢字音訳」「中国の音訳は、咖啡」と解説し、天沼（1987）においても同様の説明がなされている。笹原（2006）も宇田川の語彙集の写真を掲げたうえで、玉偏の付いた「珈琲」は「コーヒー豆（ビーン）を玉になぞらえたものなどといわれるが、そうなのであろう」とし、口偏の「咖啡」では日本人には「何か直接的な生々しいニュアンスが感じられ」るので玉偏を使って「婉曲化すると同時に、イメージを向上させようとしたとも考えられる」と述べている。当て字の辞典である笹原編（2010）でも、「珈琲」について「中国語の音訳『咖啡』の口偏を『玉偏』に置き換えた。加菲、骨喜など当て字が多い。」と説明している――すぐ後に見る通り、「加菲」も中国製の音

訳である――。佐久間（2007）の「コーヒーが『珈琲』、クラブが『倶楽部』になったり、中国でコカコーラを『可口可楽』と書いたりするのは、音だけじゃなくて漢字の意味も生かそうと努力した結果だと思う」という説明からは、「珈琲」に漢字の意味がどう生かされているかを読み取ることができないが、奥山以来の見方が前提とされているのであろう。軽信と再発信の反復による共同幻想の形成は学界もインターネットと変わりがない。

しかし、「珈琲」の『海国図志』50巻本における出現の確認により、その表記が中国と日本のいずれで作られたのかという、今までもっぱら通説や想像に頼って語られてきた問題には最終的な決着が付いた。従来「珈琲」中国製説が述べられることもときにあったが、やはり証拠を欠くために和製説を否定することができなかった[14)]。

3.2. 使用の背景

『海国図志』で玉偏を用いた「珈琲」という音訳が使われたのはどのような事情によるものであったのか。コーヒーの実の形状に着目したり宝石にたとえたりする、字義の考慮の結果だったのであろうか。しかし、「琲」は「非」や「啡」と字義が異なるだけではない。発音も明確に異なる。普通話の発音で言えば bèi である。そのことを考えれば、書き手――魏源ないし編集補助者――の方言においては「琲」を使えばより自然な音訳になるといった事情があったのだろうか。西洋人の編んだ19世紀の種々の辞書で確かめ得るように、コーヒーの名称の第2音節はピンイン式に書けば方言によってfi、fei、pi、biとさまざまであった（拙論（2020b））。

荘校注（2019）は、“『海国図志』に現れる「珈琲」と「加菲」は魏源による改訳だ”とし、“魏源の目には「加非」は「撩火加油」（火に油を注ぐ）というような連想を生じるよくない音訳語だった、だから玉偏や草冠を加えたのだ”と述べている[15)]。しかし、そのような解釈は成り立たない。「加非」の音訳に問題があるのであれば、早くから使われていた「咖啡」などを使えばすむことだったからである。また、魏源は『貿易通志』からの引用においては「加非」ではなく「咖啡」を「珈琲」に書き換えている。

『海国図志』におけるコーヒーの名称の様相は荘が考えているような単純なものではない。荘は『万国地理全図集』からの引用に現れる名称だけを見て論じているが、『海国図志』全体を確かめればまったく異なる様相が見えてくる。『海国図志』100巻本の世界各地の地誌――巻五から巻七十まで――における、確認できた限りのコーヒーの名称の表記に関する統計――各出典における音訳と『海国図志』での引用における音訳の対応の様子――を表1に示す[16)]。一部の原書は現存しないので、それらにおける音訳は今確かめることができない[17)]。表中の「(1→)2」のような表記は、50巻本での音訳が60巻本で変更され、その結果として当該の音訳の件数に増減が生じたことを示す。括弧内に小字で示しているのが50巻本での件数である。

表1　『海国図志』100巻本におけるコーヒーの名称の表記

原書名と成立・刊行年（書名は『海国図志』での表示）	原書における音訳	『海国図志』100巻本における音訳とその件数									備考
		加非	加菲	咖啡	架非	架菲	架啡	架飛	珈琲	計	
無名（『四洲志』、魏源筆）	（不明）	(1→)2			(2→)1					3	50巻本にあり
『毎月統紀伝』1833年	咖啡			1						1	
『貿易通志』1840年	咖啡			1					1	2	
『英国論略』刊行年不明	（不明）	(1→)0	(0→)1							1	
『万国地理全図集』1844年	加非	1	1						11	13	60巻本で追加
『瀛環志略』1844年	加非	2								2	100巻本で追加
『地理備考』1847年	咖啡	3								3	
『外国史略』1847年以後	（不明）	15				2			6	23	
『地球図説』1848年	喫啡				4		1	1		6	
計		23	2	2	5	2	1	1	18	54	

表1が示す通り、魏源が嫌ったと荘の言う「加非」のほうが「珈琲」より使用総数が多く――23件対18件――、しかも、『地理備考』からの引用では原文の「咖啡」を“よくない音訳語”であるはずの「加非」に改めている。表中の原書名を「無名」と記した行においても、50巻本の2か所にあった「架非」の1つが60巻本で「加非」に書き換えられている。

荘は、『万国地理全図集』における「可可子」（カカオ豆）が『海国図志』では「珂珂子」に書き換えられているということも述べている[18]。しかし、それは「珈琲」に関する荘の論にとって都合の悪い話である。論を維持しようとすれば、「可可子」にも音訳としてどのような難があるかを示さなければならなくなるからである。そして、それは荘の論にとって問題となるだけではなく、「珈琲」の音訳に字義や発音の観点から説明を与えようとするすべての者に対する新たな挑戦となる。

『海国図志』における「珈琲」の使用は、筆者の考えるところによれば、意味に基づくものでもなければ音声に基づくものでもなかった。それは、字形に基づくものであった。すなわち、魏源は音訳によく使われる口偏を使いたくなかった。『地理備考』の「咖啡」が「加非」に書き換えられ、『地球図説』における「喫啡」[19]が「架非」や「架啡」に改められたのはそのためである。『瀛環（えいかん）志略』の「加非」は口偏がないので、そのままとされた。『外国史略』での音訳はおそらく「咖啡」か「加非」のいずれかだったのであろう。そして、注目すべきことに、口偏の省略はコーヒーの名称だけに見られる現象ではない。次に示すのは謝清高口述、楊炳南筆録『海録』（1820（嘉慶25）年）の「噶喇叭（カラパ）」――ジャワ島の旧称[20]――に関する一節と、『海国図志』におけるその引用との対比である。

『海録』[21]：

噶喇叭，在南海中，為荷蘭所轄地。（中略）本荷蘭所轄地，後暎咭利師侵而奪之。（中

略）土番風俗，与大泥、咭囒丹各国同。土産落花生、白糖、丁香、咖噠子、蔗、燕窩、帯子、氷片、麝香、沈香。（ジャワ島は南海にある。当初オランダが統治していたが、その後イギリス軍が略奪した。風俗はパタニ、クランタン各国[22]と同じで、落花生、白糖、クローブ、咖噠子などを産する。）

『海国図志』50巻本、60巻本、100巻本：

葛剌巴，在南海中，為荷蘭所轄地。（中略）本荷蘭所轄地，後英吉利師侵而奪之。（中略）土番風俗，与大泥、吉蘭丹各国同。土産落花生、白糖、丁香、咖達子、蔗、燕窩、帯子、氷片、麝香、沈香。

地名の「噶喇叭」（ジャワ島）は「葛剌巴」、「荷囒」（オランダ）は「荷蘭」、「暎咭利」（イギリス）は「英吉利」、「咭囒丹」（クランタン）は「吉蘭丹」に書き換えられ、農産物の名称と見られる「咖噠子」は「咖達子」に書き換えられている。「咖達子」の第1字に口偏が残っているが、全体に口偏回避の傾向が明白である。この「咖達子」も、表1に見る「咖啡」2件もすべて『海国図志』50巻本で行われた引用の一部であり、その段階では表記の方針がまだ安定していなかったために口偏が残ったものと解釈することができる。50巻本ではほかに、「巻十二 東南洋」における張燮（しょう）『東西洋考』（1617（万暦45）年）からの引用に含まれる「咖嘓吧」（=「噶喇叭」）「哪哦山」などの地名に口偏が残っている[23]。

とすれば、「加非」という表記でもよかったわけであるが、魏源にはそれが音訳語であることを明示したいという思いもあった。そこで、不徹底にではあるが、単純な常用字である「加」と「非」の組合せを避けて「珈琲」と書いたり「加菲」と書いたりした[24]。「珈」と「琲」は玉偏の付加によって「加」「非」との差別化を図ったものであり、「菲」は草冠の付加によって「非」との差別化を図ったものである。この漢字構成要素の追加による音訳の明示は魏源に固有の考えではなく、過去の中国における一般的な慣習である。「加」を「咖」「架」「茄」「迦」などに変えたり、「非」を「啡」や「霏」に変えたりするのもすべて同じ動機による。『海国図志』における音訳表記の独自の特徴と言えるのは、徹底した口偏の省略だけである[25]。

「珈琲」は魏源が作り出した音訳なのか、それとも、既存の表記を使っただけのものなのか。これは残念ながら今確かめるすべがない。荘校注（2019）は「珈琲」を魏源の考案だとするが、そのような断定は宇田川榕庵考案説と同じく名人造語説の弊に陥っている。「珈琲」は『海国図志』を除く19世紀終盤までの中国の文献中に見出すことができず、考案者の候補として名を挙げ得るのは確かに魏源だけである。「珈琲」と「珂珂子」をともに魏源が考案したと言えば分かりやすい話になる。しかし、魏源がわざわざ新しく「珈琲」という音訳を作り出したにしては『海国図志』での出現があまりに“低調”である。すでに見た通り、『海国図志』100巻本では「珈琲」より「加非」のほうが多く使われている。そして、「珈琲」の出現には偏りがあり、表

1に見る通り、50巻本では『貿易通志』からの引用における1件だけで、60巻本では『万国地理全図集』からの引用において原文の「加非」13件のうち11件が「珈琲」に書き換えられているが、100巻本では『外国史略』からの引用に含まれるコーヒーの名称23件のうち6件が「珈琲」と書かれているに過ぎない。また、地理書の編集に際してコーヒーの名称の新しい音訳を作り出すことにどのような意味があり得たのかという疑問もある。そうしたことからすれば、魏源はむしろ既存の「珈琲」や「加菲」を気紛れに使っただけと考えるほうが自然である。

玉偏の付いた漢字で表される2字の名詞には「瑪瑙」「琥珀」「玻璃（はり）」（水晶）「珍珠」（真珠）「珊瑚」「玳瑁（たいまい）」（海亀の一種、甲羅をべっこうの材料とする）などがあり、『海国図志』にも世界各地で産する宝石類の名称として頻繁に現れる。「珈琲」と「珂珂子」もそれらにならった表記と言える。とすれば、「珈琲」はコーヒー豆を宝石に見立てた表記だという見方も成り立ち得るが、しかし、カカオ豆は“玉”と言えるような形状でもなければ宝石に見立てられるような美しい質感のものでもない。いずれにせよ、『海国図志』における引用時の「珈琲」や「珂珂子」への書き換えの目的は、口偏を使わないで音訳を明示することにあった。

魏源が口偏の使用を避けようと考えたのはなぜだったのか。それは、筆者の考えるところによれば、２つの要素から成る複合的な理由によるものであった。第１に、音訳語、特に音訳地名の多重性、不統一を部分的にではあるが解消するという目的があった。当時、英国の名称は「英吉利」とも「暎咭唎」とも書かれた。『海録』では「暎咭利」と書かれていた。内容の大部分が各種の文献からの引用で構成される『海国図志』では、音訳に関する文献間の不一致が顕在化する。そして、異表記の混在は見た目が悪く、読者による記述内容の理解にも支障を来す恐れがある。そこで、魏源は口偏を一律に省き、音訳字の不一致も減らすことにした。その方針に基づき、「英吉利」「暎咭唎」「暎咭利」の3通りの音訳は「英吉利」に統一され、「噶喇吧」「噶喇叭」「葛剌巴」[26]は「葛剌巴」に統一された[27]。魏源が地名に関する読者の理解に意を用いたことは次のような加筆の事例からも確かめられる。

『東西洋考毎月統記伝』[28] 道光癸巳年十二月（1834年1月（道光13年12月））：

三大洲之至盛為呀瓦（ジャワ）。米勝用、胡椒、燕窩、翠羽、白糖、綿花、咖啡、蘇木、木頭等貨[29]。（3つの島のうち最も栄えているのはジャワ島である。米は十分な量を産し、ほかに胡椒、燕の巣、綿花、コーヒーなどを産する。）

『海国図志』50巻本、60巻本、100巻本：

三大島之至盛為呀瓦，即葛剌巴也。産米足敷本島之用，胡椒、燕窩、翠羽、白糖、綿花、咖啡[30]、蘇木、木頭等貨。（3つの島のうち最も栄えているのはジャワ島、すなわち、葛剌巴である。産米は島内での使用に足り、ほかに胡椒、燕の巣、綿花、コーヒーなどを産する。）

ここでは、『東西洋考毎月統記伝』のジャワ島に関する記述の引用に、ジャワ島とは“すなわち葛剌巴のことだ”という解説を書き加えている。一見各種文献の記述の単なる寄せ集めにも見える『海国図志』の記述が実はそうではないことが分かる。

もっとも、音訳における口偏の有無の不統一を解消するには、すべての字に口偏を加えるという方法もあった。現にその方法を採用した、マカオ生まれのポルトガル人ジョゼ・マルチーニョ・マルケス（José Martinho Marques、瑪吉士）による『新釈地理備考全書』[31]（1847（道光27）年）では、「啞囌啞（アジア）」「啞啡哩咖（アフリカ）」「嘔囉吧（ヨーロッパ）」、「咱嚩嘟呀哩（ポルトガル）」「嘘嘶吧呢啞（イスパニア）」のような一般には見られない音訳が大量に使われている。「嗨咯嗟呸嚩呃嘶噫嘞唎吔嘶」はドイツにあった公国の名称Mecklenburg-Strelitzの音訳である。しかし、魏源はこの方法は使うことができなかった。

口偏回避の第2の目的は、著述を正字によって行うということにあった。魏源は、『海国図志』50巻本に先立って出版した『聖武記』（1842（道光22）年）――清朝の軍事の歴史と関連の問題に関する著作――の巻十二「武事余記 掌故考証」において各種の名称の表記を論じる中で次のように述べている。

> 西蔵之剌麻（ラマ）、西洋之英吉利皆不加口旁。他書皆作喇嘛、暎咭唎，字書所無。（チベットの「剌麻」にも西洋の「英吉利」にも口偏を加えない。他書は皆「喇嘛」「暎咭唎」と書くが、そのような字は字書にない。）

これを素直に受け止めれば、魏源は辞書に載っていない特殊な字は使わないという表記の方針を表明していることになる。しかし、「噶喇吧」の各字はいずれも『康熙字典』に記載があり、「暎咭唎」に含まれる「咭」「唎」の2字も同様である。したがって、「噶喇吧」は実は上記の方針に抵触しない。魏源の意図は、正確に言えば、正字であるかどうかに基づいて音訳字を決めるということではなく、非正字の混入を避けるために口偏字の使用を一律に避けるということであったと理解する必要がある[32]。

そして、これは魏源の記述から推定する以上のことができないのであるが、そのような用字上の制限には動機があった。それは、魏源は音訳字の口偏が異民族に対する蔑視、差別を表していると考えてその使用を避けたということである。魏源は上に引用した『聖武記』の一節に先立って、乾隆帝が1775（乾隆40）年5月に発した“記録文書において人名や地名は事実の通りに記さねばならない、罪人の名を悪い意味の字で書いたり、異民族に関わる記述で字に獣偏を加えたりしてはならない”という趣旨の勅令[33]を引用するとともに、既存の文書における表記の改変の事例をいくつも挙げている。口偏が蔑視を表すとする考えは、私見によれば、魏源に始まり現代の歴史研究者に至るまで中国で広く共有されているものの抜本的な再考を要する

固定観念であるが、ともあれ魏源は記述の公正の観点から口偏を使うべきでないと判断したということである。

『海国図志』における「珈琲」の表記の使用は、結局のところ、以上のような少々複雑な理由による口偏回避の方針に由来するものであった。ただし、コーヒーの名称は、「咖啡」と「喫啡」から口偏を除くだけでなく、「加」「非」に玉偏や草冠を加えた音訳も使っているという点において、地名とは扱いが異なる。

4.「珈琲」の展開

「珈琲」の出現を『海国図志』50巻本に次いで確かめることができるのは日本、すなわち、その出版から間もない時期に今見る形になったと考えられる宇田川榕庵の蘭和語彙集においてである。

4.1. 日本での受容と普及

宇田川榕庵は何によって「珈琲」という音訳を知ったのか。今それを確かめるすべはないが、可能性として指摘し得る文献は『海国図志』の50巻本だけである。60巻本と100巻本の出版も、『海国図志』の和刻本の出版も宇田川の没後のことである。そして実際、50巻本における米国の記述には宇田川が語彙集に書き加えた第2の音訳である「架非」も現れる。

> 国中進口貨物，茶葉、架非豆、紅糖、椰子、杏仁、乾菩提子、無花果、胡椒、香料、桂皮、豆蔻、米酒、氷糖、灯油、糸髪、疋頭、金線等類（後略）（米国の輸入品には茶、コーヒー豆、紅糖、椰子などがある。）
>
> （魏源撰『海国図志』巻三十八 外大西洋 弥利堅(アメリカン)国即育奈士迭(ユナイテッド・ステーツ)国総記下、1844（道光24）年）

ただし、宇田川の語彙集には中国の書籍に基づいて書かれたと見られる項目が少なくないものの――特にモリソンの英華辞典によるものがいくつもあった（2節）――、『海国図志』に由来すると積極的に推定し得る訳語は筆者の把握の限りにおいて「珈琲」と「架非」だけである。

また、宇田川が『海国図志』を通じて「珈琲」と「架非」を知ったとする推定は、江戸時代における漢籍の舶来に関する研究で言われてきたこととの関係において問題を生じる。従来知られる限りにおいて、『海国図志』の最初の舶来は伊東（1936）の記述にある1850（嘉永3）年で―― 50巻本であったか60巻本であったかは不詳――、しかも、そのときには「中に御制禁の文句があるとの廉で蔵囲になつた」[34]。もし宇田川が『海国図志』で「珈琲」「架非」を知った

とすれば、50巻本が1844年の刊行から間もない時期に日本にもたらされ、幕府の禁書政策下の状況で晩年の宇田川がそれを綿密に読んだことになる――「珈琲」は50巻中の1か所、「架非」は2か所に現れるだけである――。

さらに、宇田川が『海国図志』を読んだのであれば、なぜ語彙集に「珈琲」と「架非」の2つの音訳だけが書かれたのかという疑問もあり得る。50巻本ではほかに「加非」と「咖啡」の音訳も使われているからである。もっとも、これは宇田川が読んだ範囲に出て来た音訳だけを書き留めたと解釈することができるので、さしたる問題ではない[35)]。

いずれにせよ、宇田川の学習記録である私的な語彙集への記載がその後の日本における「珈琲」の普及に関わったことを示す事実はない。したがって、「珈琲」が中国語からの借用であることが明らかになった今、「珈琲」の語史の観点から言えば、宇田川の語彙集はもはや日本における最古の記録という意味しか持たないことになる。

「珈琲」は、宇田川の語彙集の後15年以上の空白期間を隔てて、堀達之助編『英和対訳袖珍辞書』（1862（文久2）年）に現れる――そのことは奥山（1965）にも記述がある――。そこでは coffee の訳語として「珈琲」だけが示されている。堀が何を通じて「珈琲」を知ったかも確かめようがないが、強いて言えば、いずれかの版の『海国図志』を読んで、もしくは、それを読んだ人物を介して間接的に知ったのであろう。以後、この表記は徐々にほかの辞書にも引き継がれていく。筆者の確認できた次の出現例は、メルメ・ド・カション（Mermet de Cachon）の編んだ仏英和辞典 *Dictionnaire français-anglais-japonais*（1866（慶応2）年）に見出される。そこでは café は「荳茶 cahe」と訳されているが――この cahe はほかの項目でのローマ字表記との関係から、カヘという発音を示すと考えられる――、cafetière、英訳 coffee-pot は『英和対訳袖珍辞書』に従って「珈琲壺 cahe tsoubo」と訳されている[36)]。

しかし、19世紀の各種の辞書類に書かれているコーヒーの名称の漢字表記は表2に見る通りさまざまである[37)]。そして、「珈琲」の表記が取り立てて優勢であるわけでもない。「珈琲」の使用は『英和対訳袖珍辞書』を参考にして編まれたと見られる辞書に集中している。そうした状況の中で注意を引くのは、和田音吉郎・風祭甚三郎纂訳『独和辞彙』（1883（明治16）年）で、そこでのコーヒーに関わる数項目は柴田昌吉（まさよし）・子安峻（たかし）編『附音挿図英和字彙』（1873（明治6）年）に基づいているが[38)]、後者における「加非」をすべて「珈琲」に書き換えている。もっとも、逆方向の変更の事例もあり、岩貞謙吉編『袖珍挿画専門語入新訳英和字彙』（1888（明治21）年）は、『英和対訳袖珍辞書』の記述によりつつ[39)]、「珈琲」をすべて「咖啡」に書き換えている。大槻文彦『日本辞書言海』第二冊（1889（明治22）年）でも山田美妙『日本大辞書』第六巻（1893（明治26）年）でも物集（もずめ）高見『日本大辞林』（1894（明治27）年）でもコーヒーの名称の漢字表記は「咖啡」である。辞書類には、「珈琲」がその後コーヒーの名称の日本語に

表2　19世紀の辞書におけるコーヒーの名称の漢字表記

	辞書名	コーヒーの名称の漢字表記					備考（推定される典拠他）
		加非	咖啡	架非	喫啡	珈琲	
1845（弘化2）頃	宇田川榕菴 蘭和語彙集			○		○	**魏源『海国図志』**50巻本
1862（文久2）	**堀達之助編 英和対訳袖珍辞書**					○	魏源『海国図志』（版不詳）
1866（慶応2）	Cachon *Dictionnaire français-anglais-japonais*					○	「珈琲壺」（『袖珍』）、「荳茶」
1867（慶応3）	英仏単語篇注解			○			
	買山迂夫編 対訳名物図編			○			
	堀達之助編・堀越亀之助増補 改正増補英和対訳袖珍辞書					○	『袖珍』
1869（明治2）	衛三畏著 柳沢信大校正訓点 英華字彙				○		**ウィリアムズ『英華韻府歴階』**
	日本薩摩学生 改正増補和訳英辞書					○	『袖珍』
1871（明治4）	Nugent著 岡田好樹訳 官許仏和辞典		○				
	吉田庸徳 袖珍英和節用集			○			
	日本薩摩学生 大正増補和訳英辞林					○	『袖珍』
1872（明治5）	河村文昌・沢田勝伯・明石文・明石朝幹訳 和訳独逸辞典		○				
	知新館社友同訳 英和字典				○		
	吉田賢輔 英和字典				○		
	小田条次郎・藤井三郎・桜井勇作 孛和袖珍字書				○		
	荒井郁之助 英和対訳辞書					○	『袖珍』
1873（明治6）	**柴田昌吉・子安峻 附音挿図英和字彙**	○					ロプシャイト『英華辞典』の「珈琲」を書き換え
	松田為常・瀬之口隆敬・村松経春訳 独和字典					○	
1874（明治7）	鹿田先生他 広益英倭字典					○	『袖珍』
1877（明治10）	斉田訥於・那波大吉・国司平六訳 和独対訳字林				○		
1879（明治12）	津田仙・柳沢信大・大井鎌吉訳 英華和訳字典		○				**ロプシャイト『英華辞典』**
1881（明治14）	永峰秀樹訓訳 華英字典		○				
1882（明治15）	柴田昌吉・子安峻 増補訂正英和字彙	○					『附音』
1883（明治16）	羅布存徳著 井上哲次郎訂増 訂増英華字典		○				ロプシャイト『英華辞典』
	和田音吉郎・風祭甚三郎纂訳 独和辞彙					○	『附音』の「加非」を書き換え
1885（明治18）	箱田保顕纂訳 訂訳大全英和辞書		○				
	ウエブストル氏著 早見純一訳述 英和対訳辞典	○					『附音』
	滝七蔵纂訳 英和正辞典	○					『附音』
	市川義夫纂訳 英和和英字彙大全	○					『附音』
	永井尚行編 新撰初学英和辞書	○					『附音』
	傍木哲二郎纂訳 明治新撰和訳英辞林	○					『附音』
	前田元敏訳 英和対訳大辞彙	○					『附音』
	Nuttall著 棚橋一郎訳 英和双解字典					○	
	斎藤重治訳 袖珍英和辞書					○	
	福見尚賢・小栗栖香平纂訳 図画挿入独和字典大全					○	
1886（明治19）	中村秀穂纂訳 仏和辞書		○				
	斎藤恒太郎纂述 和訳英文熟語叢					○	
1887（明治20）	野村泰亨纂訳 仏和辞林		○				
1888（明治21）	岩貞謙吉纂訳 袖珍挿画専門語入新訳英和字彙		○				『袖珍』の「珈琲」を書き換え
	島田豊纂訳 附音挿図和訳英字彙		○				
	イーストレーキ・棚橋一郎訳 ウェブスター氏新刊大辞書和訳字彙	○					『附音』
	豊田千速訳 挿画訂訳ダイヤモンド英和辞典					○	
1889（明治22）	尺振八訳 明治英和辞典		○				
	大槻文彦 日本辞書言海		○				
1893（明治26）	中江篤介・野村泰亨訳 仏和字彙		○				
	山田美妙 日本大辞書		○				
1894（明治27）	物集高見 日本大辞林		○				
1896（明治29）	藤井乙男・草野清民 帝国大辞典		○				
1897（明治30）	林甕臣・棚橋一郎 日本新辞林		○			○	
1898（明治31）	落合直文 日本大辞典ことばの泉					○	

おける代表的な漢字表記になる兆しすら見えない。

ところが、不思議なことに、辞書以外の一般の出版物はまったく異なる様相を呈している。国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/）の検索機能を使って調べてみると、「珈琲」は明治初年から広く使われ、使用頻度において「咖啡」「加非」などを大きく上回っている。それによれば、「珈琲」は瓜生政和編『西洋新書四編』巻之下（1872（明治5）年）に現れる「珈琲（かつひ）」に始まり――ただし、同書では同じ箇所に「加非（かつひ）」という表記も出て来る――、19世紀だけでも100件余りの書籍におけるその使用が確かめられる[40]。もっとも、筆者の粗い調査で見出すことのできた「珈琲」の最初の使用例はもう少し早く、次の幕末のものである。

> 輸出の産物は砂糖、羊毛、鯨油、米、綿、蜜柑、糖蜜なり。珈琲、塩、石炭、牛肉、獣皮、獣脂、山羊皮、馬鈴芋（ジヤガ）、果実等も少なからす。
>
> （『万国新聞紙』[41] 慶応3年6月中旬、「『ハワイ』島 即『サンドウヰチ』島」、1867（慶応3）年）

そして、明治初年には「珈琲」は次のように商品の広告にも使われており――これは奥山（1957）にも指摘がある――、当時すでに少なくとも横浜ではそれなりに知られていたものと見られる。「珈琲」に添えられた振り仮名に頼って理解する読者もあっただろうが、こうして表記は広まっていったはずである。

> 鰯魚漬（いわしづけ）○乳汁（うしのちゝ）○橄欖油（をれへふゆ）○酢（す）○英吉利塩（いきりすしほ）○芥子（からし）○筆（ふで）○甘（あま）キビスコイト（ビスケット）○瓶入果物漬（つぼいりくだものつけ）○生珈琲（きこをへい）並焼珈琲（やきこをへい）○蝋燭（らうそく）○（中略）○紙類○長沓○石鹸（しやぼん）○石炭油○沓塗墨○砂糖漬○清浄砂糖（ぱうさとう）
>
> （『万国新聞』明治2年3月下旬、「横浜裁判所向 ヱドワルズ」の広告、1869（明治2）年）

辞書と一般の出版物のあいだに見られる以上のような不一致に関して2つのことが問題となる。その第1は、その不一致が何によるのかということである。これは、筆者の推定によれば、辞書の編集にはしばしば中国で出版された各種の英華辞典が利用されたことによる。すなわち、「珈琲」は『海国図志』で使われたが、英華辞典には一度も書かれることがなかったために、日本の辞書への登録に関してまったく不利な立場にあったということである。中国の辞書によって定められる規範の外に位置する音訳であったと言ってもよい。実は、デジタルコレクションの検索によれば、辞書以外に、官報においても長いあいだ「咖啡」の表記が支配的であった。それもまた辞書の場合と同様の規範意識によるものであったかも知れない。『日本国語大辞典』第2版第5巻（小学館、2001年）は「珈琲」について、「明治三〇年代末頃から徐々に定着し始め、以後もっぱらこの表記が使われるようになった。」と述べているが――前田監修

（2005）でも同じ解説が繰り返されている――、それは辞書の世界の特殊事情であり、現実の日本語には当てはまらない。辞書に頼った語史の考察の限界を端的に示す一事例である。

第２の問題は、その後一般の出版物においても辞書においても「珈琲」が一般化し、それまで使われていたほかの音訳をすべて駆逐したのはなぜかということである。この問いは２つの要素を含んでおり、なぜ表記が1つになったのかという問題と、なぜその1つに「珈琲」が選ばれたのかという問題である。まず前者は、私見によれば、音訳の統一は社会の近代化に伴う言語表現の多様性の淘汰の一例にほかならない。scienceの訳語の多様性が淘汰によって「科学」に収束し（拙論（2016））、英国の言語の名称が「英語」に統一され（拙論（2018））、ドイツ国名の数十種類にのぼる和製の音訳が廃れて「独逸」と「独乙」だけが残った（拙論（2020a））のと共通の現象である。日本の辞書編集に対する英華辞典の影響が時とともに弱まる中で、社会に最も普及していた表記が標準の地位を占めることになったのであろう。他方、後者の問題は、残念ながら解明がむずかしい。「珈琲」に美しい意味を読み取ろうとする考えの普及は奥山の著述以後の現象に過ぎない。明治期にあって、各種の表記を自ら比較評価して「珈琲」を選んだ人も、辞書での表記を確かめてそれに従った人も多くはないであろう――実際、辞書では現実の日本語に比べて「珈琲」の普及が遅れていた――。圧倒的大多数の人は単に日常生活の中で接する表記に従っただけのはずである。そのように考えれば、「珈琲」が選ばれた理由は分からないにせよ、表記の慣習が形成された過程はおぼろげに見えてくる。すなわち、明治初年にあってコーヒーは新しい舶来物であった。とすれば、その輸入や流通の場面で使われた名称の表記が大きな影響力を持ったはずである。実際、上で見た通り、1869（明治２）年の『万国新聞』に載った「横浜裁判所向 ヱドワルズ」の広告ではコーヒーは「珈琲」と書かれていた。そして、それはおそらく書き手の独自の選択によるものではなかった。『大日本各港税関輸出入物品表 明治六年第一月分』（1873（明治６）年）を確かめてみると、横浜税関と長崎税関の輸入品一覧の品名欄に「珈琲」と書かれているのである[42)]。そこでは片仮名で「コーヒー」「コヒー」と書いていた神戸税関も同年３月分の『輸出入物品表』では「珈琲」と書いている。明治初年にはすでに「珈琲」の広範な普及の下地ができていたものと推定される[43)]。

「珈琲」のその後の普及に関わる注目すべき事実として、明治中期の検定教科書『高等小学読本』の一課にその表記が繰り返し出現する。当該の課は、日本におけるコーヒーの普及の歴史の記録にもなっている。

> 我国人（こくじん）の一般に用ふる飲料は茶なれども、近来外交の開けてより、珈琲と云へるものゝ輸入ありて、茶と共に之を飲用するもの少からず。珈琲も亦茶の如く、味美はしくして、胃を健やかにし、精神を爽やかにする善良なる飲料なれば、他日盛に国内に用ひらるゝに至

るべけれども、現今に在りては僅に三府其外繁華なる都会に行はるゝのみにて、広く山村僻落の地までに行き亘らざるが如し。（中略）欧米諸国にても之を飲み習ひたるは近年の事にて、我邦の如きは僅に十数年来の事に過ぎず。

（西村正三郎・池永厚編述『高等小学読本』第五[44]、「珈琲の話」、1887（明治20）年）

教科書における「珈琲」の使用は異例のことであった。コーヒーの名称がよく出て来るのは世界地理の教科書であるが、そこでは筆者の確認の限りにおいて例外なく「咖啡」「加非」「喫啡」などの音訳が使われていた。これは、筆者の理解によれば、辞書と官報に加えて、教科書であるかどうかを問わず世界地理書においてもまた一般の日本語に比べて「珈琲」の普及が遅れたということである。それは、世界地理の記述は既存の文献に依拠する必要があることから、伝統の長い音訳が根強く残ったということではないかと考えられる。1850～1860年代の日本では、ウィリアム・ミュアヘッド（William Muirhead、慕維廉）の『地理全志』、徐継畬（けいよ）の『瀛環志略』、リチャード・クォーターマン・ウェイ（褘理哲）の『地球説略』などの中国で著された大部の世界地理書の訓点本が出版されている――『海国図志』における世界地誌は複数の文献からの引用の寄せ集めで、同一の国についても複数通りの記述があるなど、地理書や教科書としては使いにくいものであった[45]――。それにしても辞書や地理書の書き手も「珈琲」の表記を見知っていたであろうから、それを使おうとしなかったのは、「珈琲」を通俗的な表記と受け止めていたという要素もあったのかも知れない。

20世紀における「珈琲」の標準的な漢字表記としての確立の過程を知るにはしかるべき調査を要するが、辞書類を少し確かめてみたところによれば、新たに編まれた国語辞典で最後に「珈琲」以外の漢字表記を使ったのは、上田万年・松井簡治『大日本国語辞典』第2巻（1916（大正5）年）で、同辞書は「咖啡」を使っている。また、三省堂編輯所編纂『三省堂英和大辞典』（1928（昭和3）年）は「珈琲・咖啡」と併記している。この時期を過ぎると、既存の辞書の改訂版が旧版の表記を継承しているのを別とすれば、新刊の辞書における漢字表記は「珈琲」にほぼ統一された。それは、辞書の記述が社会の慣用に屈したということであった[46]。

4.2. 中国への回帰と再消滅

中国では、今確かめ得る限りにおいて、『海国図志』以後40年近くにわたって「珈琲」の音訳が文献から姿を消す。

筆者の確認の範囲では、「珈琲」が初めて再び現れるのはThomas Watters *Essays on the Chinese Language*（1889（光緒15）年）においてである。中国語における外来語を詳しく論じた第7章に、“コーヒーの名称は一般にga fei（＝[ka fei]）と発音されるが、「加非」「架非」

「珈琲」などの少しずつ異なる多くの書き方がある”という説明があり、そこに「珈琲」が挙げられている（拙論（2020b））。これは何を意味するのか。日本に伝播して普及した「珈琲」が中国に回帰したのだろうか[47]。それとも、「珈琲」は実は中国で『海国図志』以後も――ことによっては『海国図志』以前から――連綿として使われていたのだろうか。筆者の想像によれば、おそらくそのいずれでもなく、同書の著者は『海国図志』を見て「珈琲」の音訳を知った。当該の章の2か所の注から、著者が『海国図志』を綿密に読んで外来語の考察の参考にしていることが分かるからである。また、50頁を超える同章に挙げられた多数の外来語に確実に日本語の影響と言える要素は見出せない。

黄編著（2020）には、同じく1889（光緒15）年の傅（ふ）雲竜『游歴日本図経』における「珈琲」の出現が記述されている。同書は「游歴日本図経十三 日本食貨三」に日本の商標に関する統計の表を掲げており、そこに商標の種類の1つとして「茶珈琲」と書かれている。統計表は内閣統計局編『第六回 日本帝国統計年鑑』（1887（明治20）年）からの引用と見られ、そこに掲げられた「商標登録種類別 明治十九年十二月調」と題された表に「茶及珈琲類」と書かれている――統計の数値も一致する――。したがって、『游歴日本図経』は「茶及珈琲類」を「茶珈琲」と短縮してはいるものの、「珈琲」は日本語での表記をそのまま使ったものであることが分かる[48]。

黄編著（2020）の挙げるそれに続く用例は、1897（光緒23）年に出版された地理文献彙集である王錫祺（しゃくき）輯『小方壺斎輿地叢鈔』再補編第十二帙に収録された『万国地理全図集』におけるものである。これは日本語とは関係がなく、『小方壺斎輿地叢鈔』に収められた文献の一部が直接の引用ではなく、『海国図志』100巻本における引用の再引用である（拙論（2019））という事情による。『万国地理全図集』についても同様であることが、例えば「巻十三 南海各島」の記述に関わる次のような対比から知られる。「φ」は原文のその位置にある表現が省かれていることを示す。

『万国地理全図集』[49]：

西里百島（スラウェシ）（中略）物産係加非、蘇木、燕窩、海参、瑇玳等貨。（産物はコーヒー、スオウ、燕の巣、ナマコ、タイマイなどである。）

呀瓦（ジャワ）島（中略）田地在海中，不得更豊盛者。所有菓実繁多不勝数，加非，米，穀，白糖，一概裕生。（田地は海域中最も肥沃で、コーヒー、米、各種穀物、白糖などすべて多産である。）

『海国図志』100巻本、『小方壺斎輿地叢鈔』：

西里百島（中略）産珈琲、蘇木、燕窩、海参、瑇玳等貨。

呀瓦島（中略）φ菓実繁多φ，珈琲，米，穀，白糖（後略）

したがって、当の用例は黄編著（2020）において、本来『小方壺斎輿地叢鈔』再補編（1897（光緒23）年）ではなく『海国図志』100巻本（1852（咸豊2）年）における例として挙げられるべきものであった。

19世紀末以後の中国では、日本語の影響によって「珈琲」が再び使われるようになった。まず、次の2例はともに日本の新聞記事の翻訳である。括弧内には日本語記事の原文を示す[50]。

> 戸数約五十五万四千，教会堂千四百余所，酒楼七千五百，珈琲字号千七百，客栈五百。（戸数は約五十五万四千、其中教会千四百、飲酒店七千五百、珈琲店千七百、旅館五百。）
>
> （古城貞吉訳「倫敦（ロンドン）論」『時務報』第11冊、1896（光緒22）年）
>
> 一般之土地所宜尤与農作相適，如煙草、珈琲、甘藷等，試取殖之，莫不幹葉繁茂，所結果実，味又甚美（後略）（一般の土地柄尤も農作に適し、レモン、パイナプル、煙草、珈琲、甘藷等を試殖するに、幹葉繁茂し果実又美味なるのみならす～）
>
> （孫福保訳「八重山群島開拓之好望」『実学報』第7冊、1897（光緒23）年）

第1の例は日本人による翻訳であるが、第2の例の翻訳者は中国人である。いずれの翻訳においても、原文の「珈琲」がそのまま使われている。第1の例では「珈琲店」が「珈琲字号」と訳されている。

20世紀に入ると、「珈琲」は日本文の翻訳以外の文脈においても広く使われるようになった。総合雑誌『東方雑誌』には、同誌を出版した商務印書館の全文データベース（http://cpem.cp.com.cn/）によれば、発刊直後の1905（光緒31）年から1934（民国23）年にかけての期間に「珈琲」を文中に含む記事、広告が合わせて52件掲載された――そのうち広告は出版物の広告3件だけである――。同期間における「咖啡」を含む記事、広告は248件あるので、2つの表記の比率は約1対5である[51]。「咖啡」と「珈琲」に次いで使用が多いのは「加非」で、同期間に27件の記事がある[52]。康有為撰『不忍』第八冊（1913（民国2）年）に収められた「巴西（ブラジル）」と題した文章においても、コーヒーは「加非」とも「珈琲」とも書かれている。

日刊紙『申報』の記事や広告によれば、1928（民国17）年には上海大戯院の向かいに「上海珈琲 Café Changhaï」が開かれ、同紙の「芸術界」欄にはおそらくその開店の時期に合わせて「珈琲座」と題した談論の場が設けられた。もっとも、「上海珈琲」は店名には「珈琲」を使っているものの、図3に示す広告2件のいずれにおいても文中での表記は「咖啡」である[53]。

しかし、その後日本語から中国語への影響が弱まるとともに「珈琲」の表記は再び忘れられていった。『東方雑誌』は1948（民国37）年まで発行が続いたが、「珈琲」の使用が見られるのは1934（民国23）年までである[54]。

図3 『申報』に掲載された「上海珈琲」の広告

5. おわりに

調査と分析によって得られた断片的な情報を総合して考えれば、「珈琲」という音訳語の履歴は少々いびつなものであった。

すなわち、「珈琲」は確認の限りにおいて『海国図志』50巻本にその最初の出現が見出される。同書におけるその使用は音訳字に口偏を加えないという表記の方針を背景とするものであった。「珈琲」が魏源の考案によるものかどうかは不詳であるが、いずれにせよすでに一般化していた「咖啡」その他の音訳に対抗できず、また、人々には口偏の使用を避けなければならない事情もなかったので、中国では普及しなかった。しかし、「珈琲」は『海国図志』を通じて日本に伝わり、新しい音訳の1つとして受け入れられ、最終的にそれ以外のあらゆる音訳——旧来の日本固有の音訳と新しく中国から借用されて使われた各種の音訳——を駆逐するに至った。「珈琲」は当初規範を重んじる辞書や公的文書の文脈では通俗的な表記として避けられる傾向があったが、一般社会では明治初年からコーヒーの流通とともにそれが広まった。そして、日本で普及した「珈琲」は19世紀終盤以後に中国に再流入して使われたものの、表記の主流になることはなく、20世紀前半に消滅した。

コーヒーの名称の多様な音訳の中から中国では「咖啡」、日本では「珈琲」が最終的に残ったのは、おそらく2字の偏が揃った表記が好まれたということであろう——中国語におけるカレーの名称についても、多種類の音訳（拙論（2020c））のうち2字に口偏の付いた「咖喱」と「咖哩」だけが残った——。それにしても、日本ではなぜ「珈琲」が選ばれたのか。すなわち、幕末の『英和対訳袖珍辞書』や明治初年の『大日本各港税関輸出入物品表』にそれが書かれたのはどのような事情によるものだったのか。新たな事実の発見による「珈琲」の語史の精密化に期待したい。

注

1） この半ば通念的な音訳語の理解は実は正確ではない。音訳は表記から独立した概念である。しかし、もっぱら漢字表記語について考察する本稿の文脈ではそれで問題を生じることはなく、表現の簡潔のために一種の慣用に従う。本稿に言う「音訳語」は正確に言えば「音訳語の漢字表記」であり、「音訳」も文脈によっては同様の読み替えを要する。

2） 正しくはboon。オランダ語のboonは英語のbeanに相当する。本文で直後に示す図に見る通り、当の語彙集に現に誤ってboomと書かれている。また、「Koffij、Koffij boomの項」は正しくは「Koffijの項」である。koffij boomは見出し語ではなく、koffijの見出し語のもとに挙げられた例句である。

3） 早稲田大学古典籍総合データベース（https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/）で資料の画像が公開されている。

4） その絵には「珈琲」の各字の解釈と「コーヒーの樹の枝はその姿全体が花かんざしに似ている」という説明が書かれ、「宇田川榕庵の作字という」と書き添えられている。「～という」という言い回しから考えて、宇田川考案説は奥山ではなく勝俣の発案だったのであろう。勝俣は奥山に用例の発見と宇田川考案説の発案を手柄とさせたが、それは正否不明の説の責任を門外漢の奥山に負わせたということでもあった。

5） 奥山は「骨喜」「哥兮」「珈琲」「架非」がいずれも宇田川の筆跡だと認め、それ以上意に介していないが、実のところ、筆跡の同一性は自明であるわけではない。「珈琲」「架非」に含まれる「玉」「非」「木」などの部首は語彙集のほかの箇所での形に必ずしも一致せず、むしろ別人の筆跡のように見える。しかし、出版物や早稲田大学古典籍総合データベースで確認できる宇田川の毛筆による各種の自筆稿と照らし合わせてみたところによれば、加筆の部分も宇田川自身によって書かれたと判断して差し支えないように思われる。

6） 例えば、宇田川の語彙集にある「parallel. 平行線. 二線之間寛狭相雑(ママ)之分俱等謂之平行線.」はモリソンの辞書の「PARALLEL lines, are those between which the width is equal, 平行線. 二線之間寛狭相離之分俱等謂之平行線.（平行線。間隔が一定して等しい2本の線を平行線と言う。）」という記述に基づくと見られる。同様に、宇田川の「muis. 小老鼠. 老鼠仔.」「mathematische-instrument. 洋琺瑯規矩.」「stoom machine of stoom boot. 水蒸所使的船.」はそれぞれモリソンの「MOUSE, 小老鼠; 老鼠仔.（小ネズミ。ネズミの子。）」「MATHEMATICAL instruments, foreign, enameled, 洋琺瑯規矩.（西洋の琺瑯(ほうろう)引きの物差し。）」「A boat impelled by steam, 水蒸所使的船.（水蒸気の力で進む船。）」によるものであろう。宇田川の語彙集の一部の項目では、見出し語の誤脱や変更のために見出し語と訳語が正しく対応しなくなっている。また、「Sweden. 雪際亜. 広東俗叫做喘国. 藍旗国.（雪際亜。広東では俗に喘国、藍旗国と呼ばれる。）」における説明はモリソンの「SWEDEN, is called in Canton, 喘国; 藍旗国.」という英語による説明を中国語に訳して記録したものであろう。

「biscuit 麺包乾」「chocolade 知古辣」「paradijs 天上楽園」などの訳語もモリソンの辞書に一致するが、単純な訳語の出典の特定はむずかしい。

7） 語彙集の内容は辞書として出版できるような整った状態にはない。例えば、日本語訳を欠く見出し語や例句が非常に多い。かりに宇田川にそれを完成させて出版する考えがあったとすれば、そこに我流の音訳を含めるというのはなおさら奇妙である。

8） 関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）のWebサイト（https://www.ku-orcas.kansai-u.ac.jp/）で資料の画像が公開されている。

9） 2020年7月12日の午前に『海国図志』50巻本における「珈琲」の出現に気付いて沈国威氏に連絡を差し上げ、『貿易通志』を見せていただいて直ちに本稿に加筆したのであるが、偶然同日午後に朱京偉氏より数日

後の筆者の研究発表――内容は拙論（2020b）の概要――に関連して、荘校注（2019）がコーヒーの音訳に触れているとの教示をいただいた。筆者は同書の「導言」をわずかしか読んでいなかったのであるが、そこには確かに『海国図志』に「珈琲」が現れるとの指摘があり、それが魏源の改訳であると論じられていた。荘は確認できた「珈琲」の初出を『海国図志』60巻本の巻四十三であるとしている。60巻本は宇田川榕庵の没後に出版されたものなので、本稿の目的からすれば情報価値がやや小さいが、筆者が発見し、考えたことと共通するところのあることがすでに荘校注（2019）に書かれていたことになる。ただし、本文で後述する通り、『海国図志』における「珈琲」の使用に関する荘の議論は無効である。

なお、その後気付いたところによれば、荘・周（2009, 2010）にもすでに『海国図志』の「珈琲」に関する簡単な記述があった。

10）ここでは『海国図志』で使われている『万国地理全図集』という書名を用いるが、同書の扉に記された書名は『万国地理全集』である（荘（2007）、荘校注（2019））。

11）100巻本の巻四における依拠資料の説明に「馬礼遜之外国史略」と書かれている。

12）ただし、杉本の見解はその後変遷し、杉本（1986）では「中国製である」とする話に変わり、杉本（2005）では「いささか中国産と断定するのも心もとない」と述べられている。

13）国語学会編『国語学辞典』の「あて字」の項目（山田（1955））に、「幕末・明治初期にかけて流行した外来語の語釈」の例として次の6語がこの順で挙げられている。

莫大小（メリヤス）、金平糖、合羽、羅紗（ラシャ）、襦袢（ジュバン）、倶楽部

築島（1964）はこれを執筆に利用したと思しく、次に下線を施して示した数語を加えて「外国語を音訳した類」の例としている。

莫大小、煙草（タバコ）、煙管（キセル）、金平糖、合羽、更紗（サラサ）、羅紗、襦袢、倶楽部、珈琲、護謨、喞筒（ポンプ）、硝子（ガラス）

日本語における漢字の用法を正確に論じるには、和製の音訳と中国からの借用による音訳を区別して扱う必要がある。話を単純化して言えば、前者は日本語における漢字の読みに基づいて作り出された――すなわち、日本人が漢字を当てた――ものであるが、後者は中国製の表記をそのまま使っているに過ぎないからである。荒川（1932）は、「珈琲」が和製の音訳だとは書いていないが、それを多数の和製の例と区別することなく挙げている。同様に、山田（1940）や森岡編著（1969）も、和製の音訳の例の中に「珈琲」「檸檬（レモン）」「三鞭（シャンペン）」などを混ぜて挙げている。「檸檬」も「三鞭」も19世紀前半の中国で出版された辞書や語学書中に見出される音訳である――「檸檬」は中国語方言におけるlとnの混同を背景とした音訳であろう――。荒川、山田、森岡が「珈琲」その他を和製と考えたのか、作成の地を問わず例を挙げたのかは不明であるが、いずれにせよすべての例が和製だという誤解を招く不適切な記述である。山田（1955）と築島（1964）を含む多くの論者の挙げる「羅紗」という音訳もおそらく中国からの借用である。

築島の挙げた音訳語の例には別の意味で異質なものがいくつも混じっていることも注意に値する。例えば、「莫大小」「煙草」は表記上は意訳であり、漢字の読みを使って表記された通常の音訳語とは性質が異なる。拙論（2015）で考察した「牛津（オックスフォード）」のような地名――発音は原語に従うが、表記上はOxfordを翻訳する――と同じく、音訳と意訳の二面性を有する。

ただし、二面性と言っても、「牛津」や「莫大小」「煙草」における音訳と意訳の要素は対等の関係にはない。音声言語を基本と見る現代言語学の常識に基づいて言えば、それらの語は第一義的には音訳語であり、その漢字表記が意訳的であるに過ぎない。拙論（2015）では「牛津」を先行研究にならって「意訳地名」と呼び、二面性に基づいて「半面意訳地名」、略して「半意訳地名」とも呼んだが、いずれも適切ではなかった。

14）劣勢の中国製説も歴史は長い。斎藤（1937）は、コーヒーを「咖啡」と書くのは中国語である、中国語には「咖啡のほかに加非、咖非、珈琲、架非などがある」と述べている。

15）「加非」という音訳がなぜ「撩火加油」という連想を生じると言うのかは不明である。中国出身の留学生数人に尋ねてみても分からず、「加非」を印象の悪い音訳だとも感じないとのことであった。荘の論述の原文は次の通りである。

「加菲」、「珈琲」實爲魏源之改譯。在輯錄《全集》時，魏源多處沿用《全集》的「加非」，但在他的眼中，這是個差劣音譯詞，給人一種撩火加油的聯想，因此易「非」作「菲」，變成「加菲」；或在「加」、「非」二字加上斜玉偏旁，變成「珈琲」。（「加非」と「珈琲」は魏源による改訳である。魏源は『万国地理全図集』の記述を『海国図志』に収める際、『全図集』の「加非」を多くの箇所でそのまま使ったが、魏源の目には“撩火加油”というような連想を生じるよくない音訳だったので、「非」を「菲」に変えて「加菲」にしたり、両字に玉偏を加えて「珈琲」にしたりした。）

内容から考えておそらく、「加非」は「非」の表す悪い要素あるいは非難を加える、増すという連想を生じるということなのであろう。いずれにせよ、この解釈の問題は本文での議論には影響しない。

なお、上の引用中に「魏源多處沿用《全集》的『加非』」とあるのは誤りで、『海国図志』が『万国地理全図集』の「加非」の表記を継承しているのは表1に見る通り1か所だけである。

16）世界各地の地誌以外の部分では、確認の限り、巻八十一に収められた「澳門（マカオ）月報二 論茶葉」に「架非」という表記が出て来るだけである。

17）『四洲志』『英国論略』『外国史略』の3件がそれに該当する。リチャード・クォーターマン・ウェイ（Richard Quarterman Way、禕（い）理哲）『地球図説』（1848（道光28）年）も所在が知られておらず、表1には同著者によるその改訂版である『地球略説』（1856（咸豊6）年）における音訳を示した。

18）ただし、カカオ豆の名称における「可可子」から「珂珂子」への書き換えは1か所にあるだけで――もっとも、カカオ豆の名称が『海国図志』100巻本を通じてわずかしか出て来ないのでそのことはいぶかしむに足りない――、しかも、「珈琲」の直後の文脈におけるものである。

19）この「喫啡」は『地球図説』の改訂版である『地球略説』における表記であり、確実ではない（注17）。『海国図志』の1か所では「架飛」として引用されているという事実もある。したがって、『地球図説』での表記は「喫飛」であった、あるいは、「喫啡」と「喫飛」の併用であったという可能性も考えられる。

20）「噶喇叭」――椰子を表すマレー語kalapa、kelapaの音訳――は中国人が本来ジャカルタを呼んだ名称であるが、ジャワ島を指すのにも使われた（陳・謝・陸編（1986）他）。

21）引用は1842（道光22）年の刊本による。

22）文中にある「大泥」と「咭嚩丹」はおそらくマレーシア半島にあった古国パタニ（Patani）とクランタン（Kelantan）をそれぞれ指す。

23）ただし、引用が60巻本や100巻本に継承される際になぜ口偏が除かれなかったのかという問題はある。いずれの段階でも多少とも字句の変更は行われているからである（拙論（2019））。また、表1に見る「架啡」1件は100巻本における引用時に「喫啡」の第2字の口偏を除き忘れたものである。こうした問題についてさらに考えるには、音訳を示す口偏が各種の事例においてどのように処置されているかを全面的に確かめる必要がある。

24）「加菲」の出現は『海国図志』100巻本全体を通じて2度だけである。具体的には、表1に見るように、『英国論略』からの引用において50巻本で「加非」と書かれていたのを60巻本で「加菲」に変更し、『万国地理全図集』における「加非」の1件を60巻本で「加菲」として引用している。「加非」の加工の方法が一定していないのは編集者が複数いたためかとも想像されるが、確かなことは分からない。

25）口偏回避の方針はおそらく魏源自身の判断によるものであった。『海国図志』編纂の基礎とされた『四洲志』を魏源に提供した林則徐が口偏を多用したことは、中山大学歴史系中国近代現代史教研組研究室編『林則徐集 公牘』（中華書局、1963年）によって確かめることができる。

26）「噶喇吧」は陳倫炯（りんけい）『海国聞見録』（1793（乾隆58）年）、王大海『海島逸誌』（1806（嘉慶11）年）、ギュツラフ編『東西洋考毎月統記伝』（1833～1837（道光13～17）年）、「噶喇叭」は謝清高口述『海録』（1820（嘉慶25）年）、「葛剌巴」はギュツラフ『万国地理全図集』（1844（道光24）年）における音訳である。『海国図志』ではそれらがすべて「葛剌巴」と書かれている。

27）ただし、「咩」（miē）のように口偏を取ると読みが変わってしまう漢字はそのまま継承された。

　また、口偏に関わらない音訳には不統一が多く残っている。例えば、英国は「英圭黎」や「英機黎」とも書かれ、America(n)は「墨利加」「美理哥」「弥利堅」などと書かれている。

28）この『東西洋考毎月統記伝』（注26）を表1では『海国図志』における略記法に従って『毎月統紀伝』と書いた。同誌において「記」と「紀」の字が両方使われており、どちらかが誤っているというわけではない。

29）「米勝用」に続く部分は作物名の列挙で動詞を欠くが、原文の通りである。直後に掲げる『海国図志』からの引用についても同様である。

30）この「咖啡」は、『海国図志』におけるその例外的な残存2件（表1）のうちの1つである。

31）表1で『海国図志』における略記法に従って『地理備考』と書いたのが、この『新釈地理備考全書』である。扉には『外国地理備攷』と書かれるなど、書名にゆれが見られる。

32）魏源の言う「字書所無」は、「喇嘛」や「喫咭唎」に含まれる字ではなく、そのような語が辞書に載っていないという意味にも解釈し得る。しかし、そう考えてもやはり事実に合致しない。例えば、Robert Morrison *A Dictionary of the Chinese Language, Part I*『字典』, Vol. I（1815（嘉慶20）年）には「喇嘛 The Lama of Thibet, or any of the priests of that religion（チベットのラマ、また、チベット仏教の僧侶全般）」とあり、Robert Morrison *Vocabulary of the Canton Dialect*『広東省土話字彙』（1828（道光8）年）はフランスを「仏囒哂国」と書いている。また、Samuel Wells Williams *An English and Chinese Vocabulary in the Court Dialect*『英華韻府歴階』（1844（道光24）年）は――これは『聖武記』より少し後の出版であるが――、Dalai Lamaを「達頼喇嘛」、English（英国の）を「喫咭唎的」と訳している。そして、中国人の編んだ辞書に「喇嘛」や「喫咭唎」が載っていなかったとしても、それはそもそもその種の外来語が収められていないということに過ぎず、魏源の論じる口偏の問題には関係しない。

33）原文は『大清高宗純皇帝実録』（大満洲帝国国務院）巻之九百八十三に収められている。

34）大庭編著（1967）によれば、『海国図志』は1852（嘉永5）年に舶来し、伊東の記述にあるような処分を受けている。両者が同一の事実を記述しているとすれば、新しく、かつ、詳細な大庭編著（1967）の記述のほうがおそらく正しいと考えられる。

　『海国図志』について源（1993）は、「当時の日本が最も欲していた世界の事情についての情報を満載した本として、当時の日本人に熱狂的に受け容れられた」「幕末の日本にこの本ほど影響を与えた中国の本はないであろう」と述べている。訓点本として出版された中山伝右衛門校『海国図志 墨利加（アメリカ）洲部』巻六（1854（嘉永7）年）では「珈琲」はチリとブラジルの記述に合わせて4度現れる。

35）「珈琲」は先に見た通り巻八のルソン島に関する記述に現れる（3.1）。「架非」は巻三十八の米国に関する記述のほか巻十四の「阿丹国」（別名「阿蝋比阿（アラビア）」）に関する記述にも現れ、宇田川がどちらを見たかは分からない。宇田川の語彙集に書かれていない「加非」は巻十四の「阿丹国」と巻三十四の英国、「咖啡」は巻十の「葛留巴島」（ジャワ島）と巻十四の「巴社（ペルシャ）国」に関する記述に現れる。

36）カションの仏英和辞典の編集に『英和対訳袖珍辞書』が利用されたことが、レオン・パジェス（Léon Pagès）による巻頭の前文に述べられている。

なお、カションの辞書の bonifier の項目――英訳 to improve; to make good、和訳「善ク為ス yocou（よく） sourou（する）; yocou（よく） nasou（なす）」――には、bonifier le café という句例があり――to improve coffee、「豆茶ヲ善（ママ）ニスル cahe-o（カヘを） yocou（よく） sourou（する）」――、日本のコーヒーの品質に西洋人が不満を感じていたことが知られる。

37）表2では、コーヒーの名称の漢字表記に関して後の辞書に大きな影響を与えたと見られる出版物をゴシック体で示した。

正確に言えば、表2は各辞書のコーヒーの名称の項目に書かれた表記をまとめたものであり、それ以外の項目には異なる表記が現れる可能性がある。例えば、『英和対訳袖珍辞書』において canister の項目の語釈は「籠。筒。管（加非茶等ヲ入ル）」であり、そこでは「加非」という表記が使われている。「加非茶」という3字語、すなわち、“コーヒー茶”は飲料の形になったコーヒーを表す当時の中国語での名称であるが（拙論（2020b））、ここでの「加非茶等」は「加非、茶等」ということであろう。

38）Kaffee、coffeeの訳語およびKaffee、coffeeを前要素とする複合語の範囲とそれらの訳語に関する共通性が比較的高い。

39）coffeeおよびそれを前要素とする複合語の訳語が一致している。

40）デジタルコレクションで検索できるのは、同データベースに収められ、かつ、指定したキーワードを書名や目次に含むという2条件をともに満たす書籍だけである。本文に記した「100件余り」という数はそうした制約下で筆者の行った限定的な確認によるものであり、「珈琲」を含む書籍の実数はそれより相当多いはずである。

41）表紙には「英国教師ベーリー先生編」「横浜百六十八番発兌」などの表示がある。紙名は後に短縮されて『万国新聞』になった。

42）月ごとの『大日本各港税関輸出入物品表』――書名は多少変遷する――は国立公文書館デジタルアーカイブ（https://www.digital.archives.go.jp/）で画像が公開されている。前年までの1年ないし半年単位の『各開港場輸出入物品高』ではコーヒーはもっぱら「コーヒー」と仮名書きされている。

43）明治6年4月分の『輸出入物品表』からは、半年以上にわたって表記が「咖啡」に変更されている。「珈琲」の表記は好ましくないという判断がなされたのであろう。その後再び「珈琲」も使われるようになった。規範を守ろうとする力と慣習に従おうとする力が競合していたものと考えられる。

44）西村・池永編述『高等小学読本』は8冊より成る。当時の高等小学校は4年制で、現在の小学校5年から中学校2年に相当する。第五の使用時期は現在の中学校1年の前半に相当する。

なお、当の教科書で「珈琲」の読みは示されていないが、そのことから推論できることはない。同教科書は漢字表記語の読みを全般に示していない。

45）また、『海国図志』は日本では部分的に翻刻されただけであった。

46）辞書類にはほとんど見られないが、一般の出版物では「珈琲」の変形と見得る「珈啡」「珈菲」「加琲」「咖琲」などの表記も使われていた。書き手が現にそのように書くこともあれば、印刷の段階で表記が変わることもあったのではないかと想像される。

47）当該書の内容から、著者が日本や日本語に関する関心と知識を持っていたことが知られる。『英和対訳袖珍辞書』の改訂版に基づいて編まれ、上海の American Presbyterian Mission Press――米国長老派教会の印刷所、別名美華書館――で出版された日本薩摩学生序『改正増補和訳英辞書』（1869（明治2）年）ではcoffeeは「珈琲」と訳されている。著者がそうした英和辞典を入手していたことは考え得る。

48）『第六回 日本帝国統計年鑑』の「茶及珈琲類」は実はやや不正確とも言うべき書き方であった。と言うのは、1884（明治17）年に「商標条例」とともに定められた「商標登録願手続」の第11条に列挙されている「登録商標ヲ使用スル商品ノ種類」の1つは「茶及珈琲類」だからである。『日本帝国統計年鑑』での「茶及珈琲類」はそれを書き換えた形になっている。この変更も表記の規範と慣用のずれを背景としていると考えられる。

『日本帝国統計年鑑』は第一回（1882（明治15）年）から輸入物の統計表において「珈琲」の表記を使っているが、第六回ではそれが「珈琲」に変更されている。ただし、第七回では再び「珈琲」に戻るなど、不安定な様相を呈している。

49）引用は荘校注（2019）における翻字による。

50）日本語記事はそれぞれ、『国民新聞』1896（明治29）年10月16日に掲載された徳富蘇峰「倫敦の触目偶感」、『中外商業新報』1897（明治30）年9月25日に掲載された「八重山群島開拓の好望」である。

51）「珈琲」「珈琲」に関する統計には、各語を含まずカフェインを表す「珈琲因」「珈琲因」を含む記事各1件を含めている。

52）検索によって得られる「加非」という文字列を含む記事はもっと多いが、そのすべてがコーヒーの名称を含むわけではない。「加非」が固有名詞の音訳――例えば、民族名カフィール（Kafir）を表す「加非爾」――の一部である記事などがいくつもある。

53）なお、日本語の場合（注46）と同様に、『申報』にも「珈琲」「珈琲」という混合表記が見られる。

54）ただし、これは大陸の中国語に関する状況であり、日本の影響の要素の多い台湾では日本に関わる文脈を中心として今なお「珈琲」が広く使われている。

参考文献

天沼寧（1987）「『紅茶』と『コーヒー』」近代語学会編『近代語研究』第7集（武蔵野書院）
荒川惣兵衛（1932）『外来語学序説（「モダン語」研究）』（荒川惣兵衛）
石綿敏雄（1988）「洋語の受容」金田一春彦・林大・柴田武編『日本語百科大事典』（大修館書店）
伊東多三郎（1936）「禁書の研究（上）」『歴史地理』第68巻第4号（日本歴史地理学会）
岩淵悦太郎（1970）『現代日本語―ことばの正しさとは何か―』（筑摩書房）
遠藤好英（1977）「訳語」「近代の語彙」佐藤喜代治編『国語学研究事典』（明治書院）
大庭脩編著（1967）『江戸時代における唐船持渡書の研究』（関西大学東西学術研究所）
奥山儀八郎編（1940）「日本珈琲文献略解（七）」『長崎談叢』第27輯（長崎史談会）
奥山儀八郎（1957）『珈琲遍歴』（四季社）
奥山儀八郎（1965）『コーヒーの歴史』（紀伊國屋書店）
奥山儀八郎（1973）『珈琲遍歴』（旭屋出版）
加藤彰彦（1979）「当て字」林巨樹・池上秋彦編『国語史辞典』（東京堂出版）
鎌田正・米山寅太郎（1987）『漢語林』（大修館書店）
斎藤静（1937）「日本語に及ぼしたる和蘭語の影響」『言語問題』第3巻第1号（言語問題談話会）
坂詰力治（1984）「文字・表記」宇野義方編『国語学』（学術図書出版社）
佐久間淳一（2007）『はじめてみよう 言語学』（研究社）
笹原宏之（2006）『日本の漢字』（岩波書店）

笹原宏之編（2010）『当て字・当て読み漢字表現辞典』（三省堂）
佐藤宣男（1996）「当て字」佐藤喜代治編『漢字百科大事典』（明治書院）
島田康行（2003）「当て字」北原保雄監修『岩波日本語使い方考え方辞典』（岩波書店）
白川博之（2003）「外来語」北原保雄監修『岩波日本語使い方考え方辞典』（岩波書店）
杉本つとむ（1963）『現代語―あなたが使う言葉の秘密―』（社会思想社）
杉本つとむ（1986）『読む日本漢字百科』（雄山閣出版）
杉本つとむ（2005）「近代訳語を検証する 18 ラケット（raket）コーヒ（珈琲）」『国文学 解釈と鑑賞』第 70 巻第2号（至文堂）
鈴木修次（1978）『漢語と日本人』（みすず書房）
田中章夫（1978）『国語語彙論』（明治書院）
田中春美他編（1988）『現代言語学辞典』（成美堂）
田野村忠温（2015）「意訳地名『牛津』『剣橋』の発生と消長」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第55巻
田野村忠温（2016）「『科学』の語史―漸次的・段階的変貌と普及の様相―」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第56巻
田野村忠温（2018）「言語名『英語』の確立」『東アジア文化交渉研究』第 11 号（関西大学大学院東アジア文化研究科）
田野村忠温（2019）「言語研究資料としての近代中国地理文献彙集の信頼性―『海国図志』と『小方壺斎輿地叢鈔』―」『或問』第36号
田野村忠温（2020a）「ドイツ国名『独逸』成立の過程とその背景―社会的条件と日本語における音訳語の特異性―」『東アジア文化交渉研究』第13号（関西大学大学院東アジア文化研究科）
田野村忠温（2020b）「コーヒーを表す中国語名称の変遷」『或問』第37号
田野村忠温（2020c）「カレーを表す中国語名称の変遷」『或問』第38号
陳力衛（2011）「近代日本の漢語とその出自」『日本語学』第30巻第8号
築島裕（1960）「宛字考」『言語生活』第106号
築島裕（1964）『国語学』（東京大学出版会）
月本雅幸（1984）「当て字」『日本大百科全書』1（小学館）
野村雅昭（1988）「日本語の漢字」金田一春彦・林大・柴田武編『日本語百科大事典』（大修館書店）
林大（1955）「日本語の語彙」中村通夫編『講座日本語2 日本語の構造』（大月書店）
前田富祺監修（2005）『日本語源大辞典』（小学館）
松岡洸司（1982）「外来語の歴史」森岡健二・宮地裕・寺村秀夫・川端善明編『講座日本語学4 語彙史』（明治書院）
源了円（1993）「幕末・維新期における『海国図志』の受容―佐久間象山を中心として―」『日本研究』第 9 集（国際日本文化研究センター）
峰岸明（1994）「あて字はどのようにして生まれたか」『日本語学』第13巻第4号
森岡健二編著（1969）『近代語の成立―明治期語彙編―』（明治書院）
森下喜一（1985）『現代のことば』（双文社出版）
柳田征司（1987）「あて字」佐藤喜代治編『漢字講座3 漢字と日本語』（明治書院）
山田忠雄（1955）「あて字」国語学会編『国語学辞典』（東京堂出版）
山田孝雄（1940）『国語の中に於ける漢語の研究』（宝文館）

陈佳荣・谢方・陆峻岭编（1986）『古代南海地名汇释』（中华书局）
黄河清编著（2020）『近现代汉语辞源』（上海辞书出版社）
沈国威・王扬宗（2004）「关于《贸易通志》」『或問』第7号
熊月之（2009）「郭实腊《贸易通志》简论」『史林』2009年第3期（上海社会科学院历史研究所）
莊欽永（2007）「郭實獵《萬國地理全集》的發現及其意義」『近代中國基督教史研究集刊』第7期（香港浸會大學）
［参照は庄钦永『新甲华人史史料考释』（新加坡：新加坡青年书局、2007年）に再録された版による。］
莊欽永校注（2019）『萬國地理全集校注』（新加坡：八方文化創作室）
莊欽永・周清海（2009）「十九世紀上半葉基督新教傳教士在漢語詞彙史上之地位－以郭實獵中文譯著中之舊語新詞為例」『或問』第17号
庄钦永・周清海（2010）『基督教传教士与近现代汉语新词』（新加坡：新加坡青年书局）
邹振环（2007）『西方传教士与晚清西史东渐—以1815至1900年西方历史译著的传播与影响为中心』（上海古籍出版社）
邹振环（2008）「《外国史略》及其作者问题新探」『中山大学学报（社会科学版）』第48卷第5期

（文学研究科教授）